くそれこれの話題を提供して行かれたので、窮屈も手持無沙汰もなしに、來會の時間を遲れた、ペリオ教授を待つことが出來た。やがて倶樂部の料理人が有りつたけの工夫を凝らしたといふ日本料理の宴會を始めたが、博士は曾ての日本遊歷の經驗によつて、隣席の令夫人その他に、口取り、吸物、刺身などの料理の順序から食べ方などを、大に得意で說明しつゝ、實は危かしい手つきで頻に箸を動かされた。箸ばかりではなく酒杯もまた頻に擧げられ、博士の健康を始終氣遣はれる令夫人から注意が飛んだりした。沈默勝ちなのがウルセール氏、何ごとにも如才ないのがシュバリエ氏、よく食ひよく飲み、よく談ずるのがペリオ氏で、話はいつもペ氏によつてリードせられた。

博士はこの少しく前に日佛協會雜誌に發表せられた日本の船に關する研究に引續いて、重ねて印度の船の考究に從事せられた際であつたらしく、その造船技術の由來について、言語や歷史の方面から誰彼を顧みては熱心に論談せられ、つい小さい盃の酒をこぼして、またしても令夫人の注意が加へられた。誰やらがその中、姓名判斷のやうなことをやり出したのにつりこまれた自分が、うつかり「レヰーといふ名が大學者を作り上げたやうに」といひ乍らハッと氣づいて口元をつめり上げたいやうな氣分になつた瞬間に、それを察してか察しないでか、「そのレヰーといふのも語原はよく解らないので」と、博士自身がついでくれられたのでホッとした。各自の名前を自署した葉書を京都の數氏に寄せた殘りの一枚が、今も日記の此の日のところに挾み込んであるのはよい記念である。

こんなことで初めて博士に面接した自分であつたが、その後の三月餘りを、また訪問することもしないで過ぎたのは、相變らず敦煌病に罹つて居つた爲に外ならぬ。西航記に據ると翌年三月五日土曜日の午後九時頃に、初めて博士の御宅を訪問したことを記して居る。